

## はじめに

本年（2017年）5月31日、同志社女子大学（新島記念講堂）において、「地球のステージ」公演が行われた。「地球のステージ」公演とは、NPO法人地球のステージの代表である桑山紀彦氏による、ハイビジョン映像（写真や動画）、ギターとバイオリンの演奏、そして、個人の歌と語りがミックスになったマルチメディア方式のライブ・ステージである。公演には映像や音響担当のスタッフも同行し、公演自体がNPO法人の活動の重要な部分となっている。

「地球のステージ」ホームページによれば、公演は、1996年1月15日より始まり、年間約200回の公演を数え、開催地も全都道府県に及んでいる。学校行事や、学校のPTAの研修部会などが主催している場合がもっとも多く、その約7割が学校現場である。その他、国際交流協会のイベント、婦人会大会、青年海外協力隊訓練所、任意の実行委員会形式での開催もある。

同志社女子大学の公演実績は、表1に示すように、2004年の現代社会学部



写真1 ステージでの桑山紀彦氏(藤原撮影)

現代こども学科の発足とともに、その翌年の2005年から始まり、ほぼ毎年開催され（現代社会学部主催）、2012年からは同志社女子大学主催のブランド構築事業の1つになっている（2017年まで）。公演の参加者は、毎回150名、大学主催となつてからは200〜250名に及んでいる。

以下、本稿では、地球のステージの概要紹介、公演の意義、参加者の学びの特徴などについて触れていきたい。

## 1. 桑山紀彦氏の紹介

桑山紀彦氏は心療内科医で、NPO法人地球のステージ代表でもある。宮城県

## レクチャー

# 「地球のステージ

## —公演の意義と参加者の学び—

女子大学現代社会学部教授 藤原 孝章 ふじ わら たか あき

名取市と神奈川県老名市に事務所がある。2011年3月11日に起きた東日本大震災では、宮城県名取市を中心に、被災した子どもや大人の心のケアに力を注いでこられたことは、NHKや各種新聞報道が示している通りである。氏は、1987年山形大学医学部を卒業し、同学部精神神経科に入局。翌年、山形大医学部大学院に入学する（精神薬理学専攻）。1989年からタイとカンボジアの国境地帯で難民に対する救援活動を始め、1991年6月には、湾岸戦争直後のイラクに日本人医師として初めて入国し、医療救援活動を行った。1992年に医学博士を取得、翌年からハーバード大学との共同研究として、世界の難民の精神医学的研究を開始する。1994年にはオスロ大学附属心理社会難民センターに留学し、同年2月には内戦下のソマリアで活動している。1995年の阪神淡路大震災では神戸市長田区で活動し、同年10月から旧ユーゴスラビアにおいて心理社会的ケアプログラムに関わる。2002年NPO法人地球のステージの代表理事となり、2003年には、パレスチナ・ガザ地区ラファにパレスチナ事務所を開

設した。なお「地球のステージ」初演は1996年である（桑山・2004）。

## 2. 地球のステージの概要

地球のステージは、表2に見るように、現在、ステージ1から6まである（ホームページ参照）。各編はだいたい15分から20分の時間で、映像と楽器演奏と語り、そして最後に歌で、構成されている。全体で100分ぐらいのステージである。

このほかにも、JICA（国際協力機構）の青年海外協力隊に関するパラグアイ篇、2016年より始まった国際教育協力に関するミャンマー篇がある。ちなみに、昨年の同志社女子大学での公演は、「オーブニング・フィリピン篇・パレスチナ篇（ガザ・「ふしぎな石」篇）・東ティモール篇・東日本大震災のお話・故郷篇・エンディング」で、今年は「オーブニング・パラグアイ篇・ミャンマー篇・パレスチナ篇・東日本大震災のお話・故郷篇・エンディング」であった。主催する側の要望に応じて、構成を調整することも可能である。

桑山氏は、世界各地での紛争や災害の現場にボランティアとして赴き、医療救

表2 地球のステージの講演内容(概略)

|   |              |             |            |          |                   |        |
|---|--------------|-------------|------------|----------|-------------------|--------|
| 1 | オープニング       | 放浪篇         | フィリピン篇     | ソマリア篇    | 東日本大震災の話と故郷篇      | エンディング |
| 2 | オープニング & 回想篇 | イラン震災救援篇    | パレスチナ篇     | 東ティモール篇  | 東日本大震災の話と故郷篇      | エンディング |
| 3 | オープニング       | ジャワ島中部震災救援篇 | パレスチナ篇2    | 自転車日本一周篇 | 東日本大震災の話          | エンディング |
| 4 | オープニング       | パキスタン震災復興篇  | パレスチナ篇     | ヒロシマ篇    | 東日本大震災の話と命をたどる旅路篇 | エンディング |
| 5 | オープニング       | ルワンダ篇       | ラオス篇       | ブータン篇    | 東日本大震災の話と故郷篇      | エンディング |
| 6 | オープニング       | ケニア温暖化篇     | スリランカ津波復興篇 | 終わらない貧困篇 | 東日本大震災の話と故郷篇      | エンディング |

\*東日本大震災については震災編、津波6年目篇、津波7年目篇の3つが別に作成されている。

援活動をするとともに、専門である心理社会的ケアのプログラムにおいて出会った子どもたちのケアについて取り上げている。しかし、彼が伝えたいのは、弱者や被害者(無力で支援を待つ子ども)としての子どもの姿ではない。彼の言葉を借りれば「貧困や紛争の最中にある子どもたちの明るくたくましい姿を、ライブ音楽と大画面の映像、写真、語りを組み合わせて紹介する」のが「地球のステージ」なのである(桑山・2004)。

## 2.1. パレスチナ篇の概要

①最初の語り(パレスチナの写真とともに)  
 (パレスチナは日本からずっと西に行つて、この辺りにあるところ。でも新聞テレビだけ見ていると戦争の多いところなのかなあ、と思つてしまうかもしれない。ガザ地区の南にラファという街があります。隣国エジプトとの

国境に挟まれ、いつも空爆や銃撃が絶えないところ。それがラファです。この町に事務所を置いてもう12年になります。ずっと心のケアを行つてきました。例えば絵を描いたり、粘土を創つたり、演劇をやつたり、いろんな方法で心が軽くなるような活動をしてきました。少しでも辛い出来事をはき出して、心が軽くなるように、というねらいがあります。)

②登場する人物との関わりが語られる  
 (そんな中にファラッハがいました。昨年6月、活動の中で「忘れられない光景をつくろう」と言つた時、ファラッハは粘土で血まみれのお母さんをつくりました。お母さんはファラッハが2歳の時に殺されていました。2004年6月21日、みんなで食事をしていたら突然炸裂弾が飛んできました。急いで赤ちゃんを抱き上げ立ち上がったところを2発目の炸裂弾が襲い、お母さんと弟は即死。お母さんのおなかには赤ちゃんがいました。横でご飯を食べていたファラッハも頭に重傷を負いましたが、かろうじて一命をとりとめました。)

## ③心のケア映画を創ること(心理社会的プログラム)の語り

(それ以来ファラッハはお母さんについていつもこう伝えられてきました。「お前のお母さんはなあ、血まみれで亡くなつていたのだ」と。だからファラッハは10歳だった昨年、血まみれのお母さんをつくつたのです。でも僕は思いました。お母さんの思い出が血まみれで止まつていて良いのだろうか、と。お母さんへの思い、お母さんからの想いをもつと前向きなものに変えたいと思つたのです。そこで僕は映画を撮ることにしました。もともと心のケアの中で映画を創ることは決めていたし、うちのスタッフにも映画制作を学んでほしいと思つていましたので好都合でした。)

## ④映画のクライマックスのシーンが流される(写真2の場面)

(不思議な石を5つ集めるとファラッハの母の声が聞こえるように映画が作られている―筆者注)。そして5個目の石が集まり、いよいよお母さんの声を聴くその時が来ました。下にスピーカーを置き、初めて流したお母さん

からのメッセージ。ファラッハはじつと聴いてくれました。あとの3人の子どもたちもみんな真剣に聞いていました。このシーンこそ、この映画が娯楽のためではなく、心のケアのためにつくられている一つの大きな証明になりました。ぜひ、そのお母さんの声をお聞きください。ファラッハはこの時刻めてこの録音を聞きました。彼女の表情の変化とともにご覧ください。



写真2 映画のシーンで「ふしぎな石」の声(亡くなった母の声)を聞くファラッハ(地球のステージ事務所提供)

## ⑤最後に歌が届けられる

(映画の主題歌としてつくつた「明日

## 2.2. 東日本震災篇(7年目篇)の概要

①最初の語り(被災地の写真とともに)  
 (今被災地で起きていること。それは、急激にかさ上げが行われ復興住宅が建ち並び、元の街並みは全くなつてしまいました。でもそれも一つの復興、なくしていく哀しみを抱えながらも前に進まないといけないということで、受け入れていきます。)

②語り部など被災の想いを伝える人々や、同じく日航機墜落事故(1985年8月)の記憶を伝える人との繋がりを紹介した後、震災の記憶の象徴として残されていた消防車について語られる(そんな中、歩さんの消防車が破棄されました。私たちの事務所があつた名取市下増田の消防団員3人がその中で亡くなつていた消防車です。一度破棄されかけたところを、長女の優真さんの「遺族としては残してほしい」という手紙によつて動きが止まり、ずっと閉上の消防分署の中に安置されてきました。時間がたつ中でまた考えれば良

い。つぶしてしまつたら終わりだけれど、まずは残しておいてあとで考えても良いではないか。原爆ドームも20年間木塀で囲まれて誰も手がつけれなかったのです。10年後、20年後にどうするか考えよう、ということだと思います。どまつたはずなのに、名取市はこの大切な人類の遺産までも捨ててしまいました。」

③向き合っていくことの大切さが語られる

〈向き合うということとは本当に大変なことだと思います。でもいつかは向き合わないといけない。心が痛いけれど向き合つて強くなる人と、それを避けるが余りいつまでも逃げ続ける人。皆さんがその立場になったら、どちらを選びますか？あの消防車は遺族のものでも名取市のものでない、人類のものでした。それを残しきれなかった私たちは、これからどこへ行くかとしているのか、はつきりしなければなりません。そのために「閉上の記憶」があります。たとえ消防車を失つても、たとえハードウェアとしての遺構がみんなつぶされても、語り部のみんなの口



写真3(左) 東日本大震災による津波によって被災した宮城県名取市閉上地区  
写真4(右) 東日本大震災による津波によって亡くなった消防隊員を乗せた消防車  
(いずれも地球のステージ事務所提供)

をふさぐことはできない。それは「もの」ではなく、人の「意志」が作り出す大いなるソフトウェアとしての遺構だからです。苦しいことに向き合い、それを受け入れながらも未来に向けての提案をする人が、普通に認められる世界が来ることを望みます。」

④最後に歌が届けられる  
〈それでは曲をお届けしたいと思います。子どもを亡くしたお母さんの気持ちに近づきたくてつくつた「空へ」。そして今の被災地の様子。「7年目の津波篇」でお届けです。〉

### 3. 地球のステージの意義と参加者の学びの特徴

地球のステージの意義はどこにあるのだろうか。外部者(公演・講演者)が内部者(学校の児童生徒、大学の学生、地域社会の市民など)に体験を伝えることとはどういうことか。公演(講演)という形をとつた外部者と内部者の関係性にはどのようなものがあるか、筆者は3つあると考えている(藤原・2009)。

一つ目は、外部者が専門家として現実を直接的に伝えるタイプである。

非を巡つて議論が起きたりもする伝え方である。

三つ目は、自己と社会との関わりを持ち込む(心の葛藤を語る)タイプである。自分と現地の子どもたちとの交流において、心理的な葛藤を自分のなかに組み込みながら、桑山氏が、子どもに向きあい、現実に向きあう自らの姿を映像と歌唱によつて語りかけている。それは、見ているものに、「では、自分はどうなのか」、「自分はいつたい何ができるのか」というように、反転して「内心の問い」として帰ってくる伝え方である。この3つ目が参加者の学びの特徴であり、地球のステージ公演の最大の意義である。

今回の参加者の感想でも、「自分に何ができるのか、このままでいいのか、考えさせられた」、「スーと心に入ってくる」、「すごい、逃げない、向き合う姿に感動した」、「バイト、学校、家の往復がもつたに思つた、焦り、生き方を考えさせられた」、「私にもできることがある、好きなことを追求しようと思つた」など、生き方や学び直しへの気づきともなっている(筆者注・参加者の感想は今回の公演後にとつた現代こども学

1年生のもの)。

桑山氏は、人助け、善意、奉仕として意味づけされるボランティアについて偽善を感じ、半信半疑だつたけれど、旅をしていたフリーピンでのふとしたきつかけから、ボランティアとは、自分のこと、自分の得手・不得手を教えてくれるもの、もつと積極的に言えば、「プレゼントの交換」だと気づいていく(桑山・2004)。

同志社の精神は、国際主義、自由主義(女子大ではリベラルアーツ)、キリスト教主義の3つからなっている。キリスト教主義は「自らのためだけでなく、他者のために学び、生きる」、自由主義(リベラルアーツ)は、個性を輝かせ、個人の自立・可能性を育む(「人間を育む」、国際主義は、「世界的な視野に立つて、人類の共生に取り組む」(同志社女子大学ホームページ)と筆者は理解している。

「地球のステージ」公演は、舞台としての国際性、世界性のみならず、人々と連帯して心のケアに取り組んでいること、そして紛争や貧困、被災の場にあつたたくましく生きる人々の姿から桑山氏が学んだことを伝えるものである。さらには、

二つ目は、社会の構造や対立など「社会」を持ち込むタイプである。

貧困や紛争の要因のリアルさ、そこで生きる人々のたくましさなど、あるいは震災で自分だけが生き残つた罪悪感、トリアージ(治療優先順位)の現場に立ち会う専門家の姿などを伝える場面である。参加者の感想は、「今まで、かわいそうと思つていただけの紛争や貧困地域の子どもの笑顔やたくましさに感動した」、「空に国境線がないように心の中に国境線を引いてはいけない」といつたガザでの長老の語りから、「今までの自分の考えと違うことが語られていた」など、自らのこれまでの固定観念や想像、思考を吟味し、検証に向かわせるような内容になるものである。事後に事実や行為は

学生時代から未熟で劣等感に悩みながらも日本国内や世界を旅し、人々に出会い、ボランティアとして関わることで自らを成長させていった現在の姿など、桑山氏の語りは、まさに同志社精神に相通するものがあるといえる。

## おわりに

以上のように、「地球のステージ」公演は、自分のことを率直に語り、見るものに「自分はどうなのか」と自問自答を促すような学びを参加者に引きおこす。公演終了後には、桑山氏を囲む会が生まれ、それは自らの一人ひとりの生き方について、あるいは、学生時代にすべきことについて、学生と桑山氏との深い対話の機会ともなっている。

映像と音楽と語りのメディアミックスのライブ型公演なので、紙面ではどうしてもその全体、特徴、良さを再現できないのが残念である。本稿が、「地球のステージ」公演の良さを少しでも伝えていくことを祈りつつ、ぜひ、同志社の小、中、高等学校、大学、同窓会などオール同志社において公演が実現していくことを願ってやまない。

(付記：執筆にあたってNPO法人「地球のステージ」事務局より写真の提供及び事実確認の協力をいただいた。謝して記しておきたい。)



写真5 桑山紀彦氏を囲む会(藤原撮影)

## 参考文献

NPO法人「地球のステージ」ホームページ <http://e-stageconc.org> (2017.07.01 閲覧)

桑山紀彦(2004)『地球のステージほんとうのしあわせってなんだろ

う?』メイツ出版

桑山紀彦(2005)『地球のステージ

2 国境を越えて』メイツ出版

藤原孝章編(2009)『時事問題学習

の理論と実践―国際理解・シティズン

シップを育む社会科教育』福村出版

(第7章、第8章)